京都工芸繊維大学美術工芸資料館・附属図書館所蔵の教育資料について

京都工芸繊維大学　並木誠士

【京都工芸繊維大学の沿革】

京都工芸繊維大学は、1899 年に開校した京都蚕業講習所と 1902 年に開校した京都高等工芸学校という、繊維と工芸を教育する組織を源流としている。両校は、それぞれに名称と組織を変更しながら、1949 年に新制大学京都工芸繊維大学となった。

【美術工芸資料館の教育資料】

美術工芸資料館には、54000 点を超える美術工芸資料が収蔵されている。この中核を占めるのは、京都高等工芸学校の図案科を中心に教材として使用された資料類である。

そのなかには、ロートレックやシェレ、クリムトといった 19 世紀末～20 世紀初頭のポスター草創期の巨匠の作品やフランス、ハンガリーなどのアール・ヌーヴォー期の陶器、アメリカのティファニーのガラス器など、いまでは貴重な美術工芸品類が多く含まれている。これらは、初代校長である中澤岩太や図案科初代教授の浅井忠・武田五一らが、欧米で直接購入してきた資料がほとんどであり、開校当時の最先端のデザイン資料である。

繊維関係資料の収蔵品も数多く、まさに古今東西の染織資料が蓄積されている。それに加えて、近年では、近代京都の染色産業の中心であった機械捺染関係の資料を受贈し、明治時代中期から昭和初期までの染織関係資料の充実をはかっている。建築関係では、村野藤吾資料が有名で、建築図面にもとづいて学生が製作した模型と合わせて展示をおこなっている。

さらに、開校間もない時期の実習で生徒が製作した課題作品も収蔵しており、当時の教育の実態を知ることができる。

【附属図書館の教育資料】

附属図書館は、2020 年 4 月時点で 41 万冊を超える図書と 5600 種近い雑誌を収蔵しており、日々の教育・研究に活用されている。このなかには、いうまでもなく最新の研究成果も含まれるが、京都工芸繊維大学のふたつの前身校で教育に使用されていた図書や掛図の類も含まれており、蚕業史関連図書とデザイン関係資料の充実が特徴となっている。

蚕業史関係の資料については本シンポジウムで報告されるので、図案関係に限って紹介しても、まず、明治時代中期から京都で活発な出版活動を続けている芸艸堂が発行した図案集の類が充実している点があげられる。明治 20 年頃から京都では、図案集が爆発的に流行するが、そこで展開された図案は、京都の伝統工芸が近代化をするに際し、さまざまな模索をしていたことを示している。

また、初代校長中澤岩太旧蔵のデザイン関係の洋書も収蔵されており、そこに収録されているポスター類を現地で購入して帰国していることがわかり、大変興味深い。そのほか、初期の教員が教育・研究のために購入したと思われる図書類も多く、わが国のデザイン指導の黎明期の様相がわかる貴重な図書類である。